

平成26年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	各務原養護学校	氏名	大前 奈津香
-----	---------	----	--------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

研修の目的として、旅行では見られないラオスの人々の生活を見たり感じたりしたい、そしてラオスを支援している日本の方の現場を実際に見てみたいという気持ちがあった。

文化の違いにとまどうことはたくさんあるとおっしゃりながらも、いきいきと働く JICA や NGO の方々、その方たちからお話を聞く中で、国際協力に対する考え方や、自分が今まで行ってきた国際理解教育について振り返るきっかけをいただいた。国際協力において、自分の考えを押し通すだけでは相手とわかり合えない。まずは相手が大切にしているもの、相手の望んでいることを受け止め、その上で自分のできること、やるべきことを考えることが大切。出発前に研修で教えて頂いた「国際理解の土台は『自己肯定感』。自分を知り自分を好きになること。それができる人は相手も大切にできる」という言葉があったが、ラオスでお会いした支援に関わる方の生き方は、このことを実感させてくれた。他に代わりのない自分というものを感じられるからこそ、他人も大切にできる、相手を分かろうとする。相手と分かり合えた上での支援は、双方ともに感謝と自信を生むのだと思う。これができれば、争いは必ず減ると思う。そしてこのことは、国際支援にかぎったことではない、私たちの生活すべて、もちろん学校現場にもあてはまる。自分も相手も大切にできるような『人間力』を私自身が高めることを目指すと共に、学校現場の様々な場面において、生徒に自分も相手も大切にすることを伝えるための活動を意識的に取り入れていこうと思う。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1 「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ラオスは人に癒される国であった。手を合わせて、頭を下げながら、はにかみながら「サバイディー (おはようございます、こんにちは、こんばんは)」といってくれる人々。特定の人だけが言ってくれるのではない、どこにいても、会う人会う人からそのようなあいさつをもらえるのである。心地よいあいさつは、こんなにも人の心を癒すものなのだと思つた。日本では例えばお店に入ったとき、自分が従業員の方一人一人にあいさつをすることはなく、お店によっては従業員の方があいさつしてくれないことさえあるし、あいさつはしてくれても笑顔のないあいさつであることもある。ラオスは物質的には貧しい国かもしれない、しかし、日本にはない「人を癒すあいさつのある国」だと思つた。日本とラオスのあいさつは何が違うのだろうか? と考えた時、自分自身も普段、上面のあいさつをしていたのではないかと考えずにはいられなかった。

(2) 柱2 「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ラオスで活躍されている協力隊の方々、NGOの方々、みなさんに共通していることが4つあったように思う。1つ目は「ラオスが大好き」という気持ち、2つ目に「ラオスの人々の役に立ちたい」という熱意、3つ目

に「自分の専門に対するプライド」、4つ目に「将来的にはラオス人自身で進めていくことを前提とする支援」であった。日本のやり方をそのまま押しつけるのではなく、ラオスの人々が大切にしているものを受け入れたり、ラオスの人々が継続して運営していける方法を考えたりした上で行われていた。

また、スポーツやダンス、音楽は言葉を越えることをあらためて感じた。初対面の子どもたちと真剣にバレーボールができたり、AKBのダンスと一緒に盛り上がったり、ドラえもんを合唱したときに感じた一体感は、スポーツやダンス、音楽の力を感じた瞬間でもあった。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

障がい児の学校教育（公立）の歩みという点で日本とラオスは同じ経路をたどっているように感じた。日本ではまず盲・聾学校ができ、次に病弱、そして肢体不自由、最後に知的障がいという順番であった。ラオスにもすでに盲・聾学校は設立されている。聾学校では手話も取り入れているとのことであった。しかし、知的障がいについては、かつて日本もそうであったように、まだ家庭でのみ支援をしている状態とのことだった。私たちはADDP（アジアの障害者活動を支援する会）が支援する肢体不自由の方の雇用現場（クッキー作り）を見せていただいた。ここにくるまでは何もしていなかったと言う女性は、仲間とられることが、仕事ができることがうれしいといていた。障がいの有る無しに関わらず、自分の役割を持つこと、認めてもらえることは人が生きて行く上で欠かせないものである。ADDPの斎藤さんが「障がい者支援は、まず障がい者の可能性を社会に見せていくことが大切。そしてラオス人の良さの発見と活かし方の提案」と言われていた。これは日本でも同じだと思う。個々の可能性を見ていくこと、そしてそれをいかに理解してもらうかを考え行動することを続けていきたい。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAの支援の仕方は、日本式をそのまま持ち込むのではなく、相手国の文化や人柄なども大切に、それを酌んだ上で支援を行うというものであった。相手の実状に応じて支援の方法を考え、また日本の支援がなくなったときにも、ラオス人自身の手でできるような方法というのが前提にあった。それこそが「持続可能な開発」であり、JICAが世界から必要とされているわけが分かったように思う。

JICAはすばらしい事業を行っているので、それがもっと人々に浸透するとよいと思う。支援していることをアピールすることではなくて、今回ラオスでみせてもらったような「持続可能な開発」の精神のようなものが周知されると良いなと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

① JICAラオス事務所（事業概要・オリエンテーション）

青年海外協力隊が活動を始めた最初の国がラオスであることをきいた。そのような国の国際協力の現場をみせていただけることに特別な思いを持った。お札や切手に日本が支援したものが描かれていることもJICAはじめ国際協力機関が築きあげてきたものの結果であり、そのようなものに触れさせていただける海外研修の

機会をもらえたことに感謝をしながら、所長さんや広報担当の浅野さんのお話を聞いた。これから出会えるラオスに心躍ると同時に、たくさんのことを見て感じて学ぶのだという気持ちをあらたにした。(大前 奈津香)

⑩ 青年海外協力隊（環境教育）活動（処分場、子どもセンターでの環境教育など）

環境教育の分野で派遣されている青年海外協力隊の田口桃子さんの活動を見学させて頂いた。田口さんの言葉で印象に残っているのは、「ここでは日本では当たり前であること（例えばゴミはゴミ箱へというような）を教えるのが環境教育。しかしそれがなかなか定着しない」というものである。ゴミはポイ捨てするのが当たり前のラオス、それは元々のラオスの生活様式に関係している。昔は皿をバナナで作っていたラオス、自然の物は土に戻るからとポイ捨てをし、またそれをしても環境的に何の問題もなかった。しかし現在、皿の材料はプラスチックへと変わった。しかしポイ捨ての習慣はそのまま。その結果捨てられたゴミが環境に悪影響を与える結果となってしまった。そこで田口さんは、木・たばこ・ビン・ペットボトル・バナナの皮などさまざまなもの写真カードを準備し、「早く土になるものから、時間がかかるものへとならべる」というカードゲームを行い、天然でない物が土にかえるのにいかに時間がかかるのかということ遊びの中で学んでいくようにしていた。便利さと引き替えに起こってしまった環境問題。教材を工夫し伝えようとする田口さんの活動に共感するとともに、壊してしまった自然は元に戻すのに、壊すのにかかった時間の何倍もの時間がかかるということ、ラオスの人が早く気づいてくれることを願っている。(大前 奈津香)

⑮ ルアンプラバンの観光村（紙すき・織物の村、地酒造りの村）

訪れた日が仏教の日（一ヶ月に4回ある。満月、新月、上弦、下弦）だったため、機織りはやっていたなかった。仏教の日には大きな音を出さず、心静かに過ごすということからであった。それとともに、仏教の日に機織りをしないのは、その日にはしっかり体を休めるという休息の意味も含まれているらしい。信仰心と健康のつながりを感じた瞬間であった。そして、あたかも今の今までそこで作業をしていたかのような状態のまま休みに入っているところが、人も時間もゆったりしているラオスらしかった。(日本なら、休みに入るから区切りのつくところまでとか、終わったら道具をきちんと片付けて、とかになるんだろうなあ・・・)

紙漉の村では、手作りで丁寧に和紙が作られており、それらが手帳、はがき、絵画など様々な製品になっていた。暖かみのある製品に心奪われた。(大前 奈津香)

⑲ ビエンチャンの市場（8/12 マーケット）、歴史施設（8/4 凱旋門、8/12 タートルアン）など

凱旋門：大きさは全て仏教で大切にされている数字（3・7・8）に関連している。例えば高さは「7×7」で49メートル、幅は「3×8」で24メートルという具合である。ここでもラオスにおいていかに仏教が大切にされているのかを感じることができた。

モーニングマーケット：電気街では日本でも見かけるような電化製品がたくさん見られた。DVDショップもたくさんあった。そこで売られていたのは「ワンピース・ドラえもん・名探偵コナン・ドラゴンボール・・・等々」のたくさんの日本のアニメ。日本のアニメは世界中で人気があると聞くと、ラオスにも日本のアニメが浸透していることが分かった。(大前 奈津香)

● ラオスでの食事全般

ラオスの食事はとにかくおいしい！その一言につきるといっても過言ではない。（あまりのおいしさに食が進み、太ってしまった人もいたほど。）ラオス料理に欠かせないのが、餅米を蒸した「カオ・ニャオ」。餅米の種類は白米、黒米、ミックスと様々だ。ラオスは箸を使うがこれは手で食べる。手で丸め、おかずの汁につけたりそのまま食べたり。そして、ラオス料理の店に行っても、ベトナム料理、中華料理、タイ料理的なものが出てきたことは驚きであった。これは、ラオスがいくつもの国と隣接している内陸国であり、食文化が行き来していることを感じた（大前 奈津香）

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [OME 1 8 1 2]

◇キャプション： 早く良くなってね

◇解説文：

サヤブリー県病院での一枚。家族の誰かが病気になれば、家族全員で病院へ来るのは当たり前。病人より家族の方が多い病院。家族を何より大切にするラオスの人柄を感じました。



●写真2…ファイル名 [MTM2 7 3 1]

◇キャプション： 初めてのリコーダー

◇解説文：

ケオク子どもセンターでの交流の一枚。リコーダーは見たことも聞いたこともないと言っていた子どもたち、初めて手にするリコーダーにここの笑顔！音を出すのは難しかったけれど、みんな一生懸命でした。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・盛りだくさんのスケジュールです。栄養ドリンクが効きました。
- ・何があるか分からないので湿布なんかもあるとよいかと思います（私は足をくじきました・・・）

7. その他全般を通じての感想・意見など

これ一冊あればすべてが一目瞭然、何を見て何をきいてこればよいかも明確な「マナビノオト」のすばらしさ感謝しています。そして、毎日ふりかえりをする事の大切さを痛感しました。移動が長かったり、一日中中学んでへトへトになったりしている中、正直面倒くさいと思うこともありました。しかし、それがあったから自分を振り返ることができたり、仲間から新たな視点がもらえたり、そして今なお、記憶が鮮明なまま残っているのも振り返りタイムのおかげだと思っています。JICA中部、そしてNIED・国際理解教育センター

のみなさま本当にありがとうございました。そしてラオスチームの仲間たちの支えに感謝しています。(大前
奈津香)

以上